

英米文学研究／教育の現状と展望

—マルチメディア時代と大学改革を超えて21世紀へ—

杉野 健太郎

高度情報化社会という言葉が流通し、教育におけるマルチメディア機材の有効活用の推進が叫ばれて久しい。マルチメディアとは、デジタル技術を基礎として静止画・音声・動画などのメディアを統合して処理操作できるような形態である。『パソコン用語事典』（技術評論社）には、「本、テレビ、ラジオのような既存の情報メディアを電子的に結合して各メディアの持つ限界を越え、利用価値を高くしようとしたメディア」（609）とある。その機材の中心となるのはコンピュータである。おおざっぱな言い方だが、コンピュータは、従来から特に理科系あるいは実験系の分野では大いに活用されてきたと言えるだろう。だが、文科系、とりわけ人文系の学問分野では、長い間ワープロとして使われるくらいが関の山であった。しかし、ちょうど Windows95が発売されホーム・コンピューティングが盛んになりインターネットが発達した1995(平成7)年末あたりから事態は一変した。様々な学問分野の教育へのコンピュータの活用を取り上げる『コンピュータ&エデュケーション』（柏書房）という雑誌が1996年に創刊されたことから分かるように、本格的なマルチメディア時代の到来によって、あらゆる学問分野に大いなる可能性が提示されたと言えるだろう。ちょうどその頃から英米文学研究へのコンピュータ利用に関する論文が多く見られるようになった（有馬、石木、加藤・境野論文などを参照のこと。もちろん、アメリカにおけるこの分野でのパイオニア的存在は、ジョージ・P・ランドウである）。かく言う私も、1987年に英文科の卒業論文1989年に修士論文を書いた時はコンピュータ（NEC PC98）を使用していた。しかし、ワープロにしか使わないコンピュータは不要と判断しワープロ専用機に乗り換えたものの、ちょうど1995年頃からコンピュータ（Mac）に戻り、現在はMacとWindowsの両方を利用している。現代は、人文系の学問分野でもコンピュータなしで研究・教育を行うことは極めて困難な時代であると言えるだろう。ちなみに、私が現在取り組んでいるあるプロジェクトには1960年以降生まれの研究者ばかり11人が参加しているが、この中でインターネットと電子メールを使用していなかったのは2人だけであり（ただし残りの9人の利用度には差がある）、ワープロさえも使用していなかったというものは皆無であった。

また、西暦1989年に平成という元号になってから、このマルチメディア時代の到来とともに日本の高等教育に大きな変容を迫っているのは、1991(平成3)年の大学設置基準の大綱化に起源を発する大学改革（さらには大学院改革、そして18才人口の減少化傾向）である。言わば、日本の大学では、本格的なマルチメディア時代の到来と大学改革がほぼ同時に起こっているわけである。平成という時代になってから大学は何かと慌ただしい。この大学設置基準の大綱化による大学改革の際に、多くの国立大学は、教養部を解体し教養部所属教官の各学部への分属という道を選んだ。信州大学でも1995年3月すなわち平成6年度をもって教養部を解体し、1995年4月すなわち平成7年度より新たな体制に入った。従来は教養部が責任

部局かつ担当部局であった教養教育は、共通教育と名を変えて、責任母体は共通教育センターという教官のいない組織に、担当は全学部全教官（「全学出動体制」が「平成10年度以降のカリキュラム具体化ワーキング・グループ最終報告書」〔以下「平成10年度以降共通教育カリキュラム」〕ではうたわれている）へと移管された。さらに、平成10(1998)年4月からは新たな共通教育のカリキュラムが実施されている。この新カリキュラムの実施にともなって、卒業に必要な共通教育の単位数は52から41になり、専門科目の単位数は共通教育の減少単位ほどではないが増加した（人文学部の場合6単位）。要するに、教養部の教官が各学部に移行し専門科目などを担当するようになったことにとともに、教養科目の単位が減り専門科目の単位が増えたわけである。単位数からいって、信大の現在の教養教育（共通教育）は、ほぼ一年間と言ってもいいだろう。

さて、大学の教養教育の単位が減ったからといって日本の若者の教養が貧困化したなどとは言えないだろうが、ちょうど大学改革が始まった頃にアメリカで話題になったカルチュラル・リテラシーという問題がいち早く日本にも紹介された（HirschとBloomを参照のこと）。カルチュラル・リテラシーとは、いわば文化・教養（=culture）に関する基礎知識といったものである。ハーシュ（Hirsch）もブルーム（Bloom）もともにアメリカの若者の文化的常識の無さを嘆いているわけである。彼らの言うカルチュラル・リテラシーがヨーロッパ系の白人（WASPと言いたいところだがブルームはユダヤ人）中心で偏りがあることは否定しがたいので文化の多様性を認めるべきだとは思いますが、同時に彼らの考えに耳を傾けざるをえないだろうとも思う。日本の高校卒業生のカルチュラル・リテラシーが嘆くほどかどうかは吟味が必要であろう（高等教育ではなく中等教育でもなく、ハーシュは日本の初等教育をほめている。ハーシュ『アメリカ教養辞典』1）。しかし、大学生に関しては、この問題が日本にもあることは否定しがたい。梶田論文が示すように、大学進学率の上昇もあってか、大学生が大いに变化し、そのカルチュラル・リテラシーは貧困化している。たとえば、京都大学の4年生が毎月必ず読む雑誌の御三家は『ジャンプ』『スピリッツ』『マガジン』だそうである（梶田101）。いずれにせよ、信大だけでなく日本の多くの大学で教養教育の大きな改革が行われた今、大学の教養教育とともに学生のカルチュラル・リテラシーを問題にする必要があるだろう。

以上述べたように、大学にとって平成という時代は、本格的なマルチメディア時代と大学改革とりわけ教養教育改革が同時に訪れた時代と言える。換言すれば、二つのリテラシー、すなわち、コンピュータ・リテラシーとカルチュラル・リテラシーが問題になった時代である。この二つのリテラシーという問題を受けて、各学問分野（discipline）の研究／教育は大きな変容と見直し（revision）を迫られていると言えるだろう。しかし、教養教育に関する大学教育で精一杯だったのか、平成10(1998)年10月26日に出された大学審議会の答申（「21世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境の中で個性が輝く」）のなかで学部教育の再構築・学部専門教育の見直しが叫ばれており（24―27）、また信州大学でも共通教育と専門教育を合わせた学部一貫教育カリキュラムが言われている（たとえば、「平成10年度以降共通教育カリキュラム」7-8）にもかかわらず、本格的なマルチメディア時代の到来と教養教育改革を考慮に入れた上で教養部解体に匹敵するほどの抜本的な専門教育改革をする気配は私の知る限り余りない。この二つを考慮に入れた上で専門教育を見直す必要、いや

改革する必要があるだろう。さらに付け加えると、ちょっと大袈裟な言い方かも知れないが、他の分野以上に私が従事する英米文学という学問分野は危機に瀕していると言えるだろう。英米文学の場合は、この二つの要因の上に、学生の文学離れ・活字離れ、女子学生の英文科離れ、などの要因が加わって危機的状況にある。『英語青年』が1996年9月号で「これからの大学英文科」という特集を組んだのも当然と言えるだろう。

さて、本論文では、新体制の大学における英米文学のリテラシーとマルチメディア時代の英米文学研究／教育を吟味し、英米文学研究／教育の現状と21世紀に向けての展望を検討したい。

I 英米文学のリテラシー

英米文学と言う前に「英文学」あるいは「英米文学」にすべての英語圏の文学を入れるかどうかという根本的問題（たとえば、日本の入門書でこの問題に最初に触れた例は1982年である。高柳140-47を参照のこと。）があるが、イギリスとアメリカの文学に限らせていただく。

さて、ここでいう「英米文学のリテラシー」とは、カルチュラル・リテラシーと呼ばれるものの一部である、あるいは、一部にすぎない。すなわち、学生が大学で英米文学を勉強する上で知っていなければならない基礎知識といった意味で使っている。以下、その英米文学のリテラシーを再確認し、その教育を考えてみよう。

まず、外国語に関して言えば、言うまでもないが、英米文学研究に最も重要な外国語は英語である。まず第一に英語の能力がなければ話にならない。強いて言えば、その英語能力（4技能：reading, listening, writing, speaking）の中でも読解（reading）力が一番大切である。英語以外の外国語で有益なのは、必要に応じてなればと、フランス語、ドイツ語、ラテン語、ギリシャ語、スペイン語といった順になるだろうか。その主な理由は、以下の二つである。1）英語の書物を読んでいくと、これらの外国語が頻繁に引用される。2）英米文学と関わりの深い外国文学で用いられている外国語である。実際に英米文学研究に従事していると分かることだが、フランス語・ドイツ語・ラテン語の三つは特に重要であろう。英米文学研究と言う枠組みの中で考えなくても、少なくともこの三言語の基礎力がないと英語を読んでいく上で不都合を感じる場合が多い。もちろん、*The Harper Dictionary of Foreign Terms* (Harper & Row) といった類の辞書も何種類か出版されているし、研究社の『新英和大辞典』の巻末には「FOREIGN PHRASES AND QUOTATIONS」が付いているが、これらだけでは不十分である。理想を言えば、英米文学研究に従事している研究者は、スペイン語とギリシャ語はさておき、フランス語、ドイツ語、ラテン語に関する一定の能力（どんな文でも辞書の助けを借りれば読みこなせる能力）を持っているのが好ましい。理想を言えばと言ったのは、実際はそうでないからである。たとえば、私の大学院（上智大院英米文学専攻）時代の修士入学同期生15名のうち8名が大学あるいは短期大学で現在専任として教えているが、このうちで英仏独羅すべてに一定の能力を持つという条件で頭に浮かぶのは一人だけである。かく言う私も、大学入学時は英米文学専攻でなく哲学専攻で第一外国語がドイツ語（ちなみに外国語教育という興味から書くと、一般教育〔教養教育〕科目として一年次10単位・二年次に8単位を履修。初級文法と読本は一年次の夏休み前に即ち前期

で終わり、その時点で大抵のドイツ語は辞書さえあれば読めるようになっていた。)であったため英文の中に出てくるドイツ語で困ることは余りないが、フランス語は卒業要件と関係がない第三外国語として履修して(大学審議会の答申が批判する日本の大学の甘い単位認定基準で)何とか単位をもらった程度であり、ラテン語にいたっては途中で投げ出してしまった。率直に言って、英米文学研究において仏独羅が一定程度できないとしばしば困ることがある(できなくてしばしば困っている)というのが偽らざる実感である。

更に言えば、英米文学専攻の研究者にとっては、OE (old English, 700年から1100年くらい)とME (Middle English, 1100年から1500年くらい)、すなわちシェイクスピアより前の時代の古い英語の問題がある。MEは現代英語が読める人なら現代語訳や注があれば読めるが細かい文法など細かい点まで分かって読めるかどうかは疑問である。OEは、外国語だと思ったほうがいい。英米文学(さらには英語学)の研究者でも古い時代の英語英文学を専攻していなければ、OEはできないというのが現状である。ちなみに、私の学部(上智大学文学部英文科)時代にはOEとMEの授業が開講されていた(毎年開講されるとは限らなかった)。MEはともかく、OEの授業は受講登録者は3年次生のみ4名であり、その後全員が大学院進学をし内3名が大学の専任教官になっている(ちなみに4名中3名は単位を取得、単位を取得せず途中で投げ出した1名は私であった)。すなわち、英文科一学年の定員100名のうち3名以外はOEのリテラシーなしに卒業していったわけである。だが、OEとME関連科目を開講している大学はあっても、卒業要件にしている大学は殆どない(管見に入った限りでは無い)というのが現状である。

さて、以上英米文学研究と外国語教育に関して述べたが、次に信大人文学部英米文学専攻の学生に外国語をどう教育すべきか、あるいは、しているかという問題について述べたい。まず、英語だが、信大人文学部文化コミュニケーション学科の現在のカリキュラムでは一年次に英語4単位が必修として課されている。まあ、二年生からは本格的な専門教育が始まり、英米文学分野(正確に書くと人文学部英米言語文化専攻コース英米文学分野)の授業で英語に触れない授業はないわけなので、カリキュラム上英語に関して大きな問題があるとは思えない。初修外国語(英語以外)はどうであろうか。私の学部時代は、第二外国語(選択必修)の選択肢にはフランス語とドイツ語しかなく、古い時代の英語英文学を特に学びたい者はドイツ語を(英語はドイツ語と同じ源から派生した言語だからである)新しい時代の英語英米文学(米文学は古くてもシェイクスピアと同時代)を特に学びたいものはフランス語をとると良いと入学時に指導を受けた。一・二年時に合計8単位のフランス語かドイツ語を修めるのが卒業要件であった。信大の現在のカリキュラムでは、選択肢は仏独語の他にロシア語・スペイン語・中国語・コリア語と広く、一年次に4単位が卒業要件となっている(ただし、平成11年度入学生からは、学科全体を責任母体として、専門科目の中の共通科目ともいべき外国語演習が開講される見込みである)。上で述べた通り、英米文学研究には、現代語の中ではフランス語とドイツ語がとりわけ有用である。しかし、信大の英米文学の卒業生が必ずしも英米文学研究者にならない(というより、なるものはまれである)という実状を考えると、学生の自由に任せるのがいいと思う。4単位という単位数もしっかりと履修すれば、辞書があれば当該外国語で書かれたほとんどの文を読めるという、上で私が述べた目標もクリアできるだろう。それ以上当該外国語を勉強したければ、英米文学分野から当該分野

に移るか、当該分野開講科目を受講すればよいだろう。西洋古典語（ラテン語、ギリシャ語）に関しては、当該分野で開講されている当該科目を取ればよいだろう。OEとMEに関しては、英米文学分野でも他の分野でも開講していないが、博士課程を持たない学部にとって必ずしも必要とは言えないだろう。

次に、宗教に関して述べよう。たとえば20世紀のアメリカ文学（特にビート・ジェネレーションの文学）には仏教の影響がかなりある。また、英米文学あるいは英語圏文学と言っても範囲は広く各民族に土着の宗教がある（あった）ことは否定しがたい。しかし、英米文学を勉強する際に基礎知識として知っていなければならない宗教は、やはりキリスト教であろう。まず『聖書』だが、新約は「四福音書」とパウロの手紙、旧約は「創世記」と「出エジプト記」くらいは読んでおくべきだろう。どんなに譲歩しても一年生のうちに「福音書」の一つは読むべきである。次に教会制度である。キリスト教三大教会のうち、東方諸教会はロシア文学ではないのでいいとして、カトリック教会とプロテスタント諸教派についての知識は欠かせないだろう。宗教改革、イギリス国教会、長老派教会はもちろん、モルモン教、クリスチャン・サイエンス、セブンスデー・アドベンチストといったどちらかといえば周縁的に見えるキリスト教もアメリカの19世紀、いやそれどころか20世紀（健康ブームや肉食主義や禁煙運動のルーツがここにあることは、たとえば映画 [あるいは小説] の『ケロック博士』を観れば分かるだろう）を理解する上で欠かせない。また、キリスト教関連の思想では、自由意志と恩寵という救済論にまつわるキリスト教の根本問題、特にアメリカを論じる上で欠かせない「エレミア的嘆き」やタイポロジー、など挙げればきりが無いほどである。もちろん、テキスト解釈のルーツが聖書釈義であることは言うまでもないだろう。

さて、次に哲学・思想について述べよう。と思ったが、紙面の都合もあるので止めておこう。隣接分野の英語学（とくに英語史・コミュニケーション論関係）、哲学・思想に関する知識、更には、英米（英語圏）の地理・歴史や美術そして他国の文学などに関する知識が英米文学に関する研究／教育にどれほど必要かということは他分野の方々にも十分分かっていただけたと思う。また、以上はどちらかと言えば背景的知識であるが、英米文学という学問分野の内部に属する基礎知識には、まず文学用語と批評理論が挙げられる。文学用語に関して最低限のリテラシーは持つべきだろう。これには、良い辞典が出ている。『文芸用語の基礎知識』（至文堂）は絶版だが、グレイ『英米文学用語辞典』[*A Dictionary of Literary Terms*]（ニューカレントインターナショナル、現在は蒼洋出版新社）がある。また、ここ30年の批評理論の動きは激しい。1930年代から1970年あたりに至るまでは、ニュー・クリティシズムというテキストの外部を除外する一種のフォルマリズムが長い間研究／教育を支配していた。しかし、1970年あたりになるとフランスで1950年代と60年代に起こった構造主義運動の一環である記号論や物語論が英語圏にも導入され、フェミニズムが起り、1970年代の後半になるとディコンストラクション（脱構築）、1980年代の前半になるとニュー・ヒストリシズムが盛んになった。この他にも、精神分析批評、マルクス主義批評、読者反応批評などがある。更にこれらに加えて今ではジェンダー・スタディーズ、ゲイ／レズビアン・スタディーズ、クイア・セオリー、ポストコロニアリズム、カルチュラル・スタディーズ、そしてエコ・クリティシズムと百花繚乱の観がある（たとえば、Rivkin and Ryanを参照のこと）。百花繚乱のうえに、これらの批評理論が複雑に関係しているというのが現状である。

依然としてニュー・クリティシズムが幅を利かせていたものの、日本にもディコンストラクションが導入され、ニュー・ヒストリシズムが紹介されていた頃、すなわち、ちょうど1980年代の半ば頃大学院生であった私の目から見ても目まぐるしい変化である。今や、批評理論を考慮に入れなければ英米文学研究／教育に従事することはできないと言っても過言ではないだろう。実際、批評理論専攻者を求める大学教員公募や批評理論関連の大学の授業科目が増えている。批評理論に関しては、『コロンビア大学 現代・文学文化批評用語辞典』[*The Columbia Dictionary of Modern Literary and Cultural Criticism*] (松柏社)、『最新文学批評用語辞典』(研究社)、『物語論辞典』[*A Dictionary of Narratology*] (松柏社)、『フェミニズム事典』[*Encyclopedia of Feminism*] (明石書店)、『現代の批評理論』全3巻(研究社)、『現代批評のプラクティス』全4巻(研究社)、など多くの啓蒙書が出版されている。また、『世界文学大事典5事項』(集英社)も文学批評用語に有効である。

さて、このような英米文学を学ぶ上で必要な基礎知識を現在の大学の体制においてどのように教育するかという問題に移ろう。大学に入って学生が最初に受けるのは教養教育である。しかし、言うまでもないが、教養教育は単に専門教育の準備教育ではなく専門性に偏らないことを理念としている(たとえば、信大でもそうである。「平成10年度以降共通教育カリキュラム」1-2を参照のこと。特にオウム事件の頃、この議論には追い風が吹いた。)場合が多い。したがって、たとえ単科大学においても教養教育を専門のための単なる基礎教育とみなすことがはばかれる趨勢にあると言えるだろう。また、ある専門分野に必要な(英米文学で言えば私が上記したような)基礎知識を授ける授業科目がすべてそろっているとは限らないだろうし、また、学生がそれを取るとは限らない。その上、信大の例に見られるように教養教育が縮小の方向へ向かっている場合が多い。このようなことを考慮して、私は以下のように考えている。学生には共通教育(教養教育)では自分の専門にとらわれることなく自由に(自由にとっても、単に教養教育のメニューを提供するだけでなくコア・カリキュラムを設定したり、あるいは、コモン・ベーシックを設定したりすることを否定するわけではない。コア・カリキュラムとコモン・ベーシックに関しては、「新しい教養教育への展望」を参照のこと。)学んでもらい、英米文学のリテラシーは専門教官が専門教育の初期に(信大人文学部英米文学のケースで具体的に考えれば、学生がほぼすべて1・2年次に履修する「英米文学概論」という科目で)教えればよい、と。私が挙げた英米文学のリテラシーには様々な学問分野の知識が含まれているので教えるのが大変ということがあるものの、英米文学と関係するものなら教えられるし実際教えているというのが現状である。

ところで、教養という言葉に関して、もう一つ決して忘れてはならない問題がある。それは、大学の学部のリベラル・アーツ・カレッジ化である。学部教育は教養教育と基礎的専門教育、高度専門教育は大学院でといった趨勢である。いわばアメリカの高等教育にならったこの趨勢は、現在日本では大学院の重点化という形で現われており、大衆化した大学ではなく大学院でエリート層を育成するということでもある。たとえば、1998年11月5・6日に行われた信州大学の「教養教育に関するフォーラム」では、講師として招かれた広島大学総合科学部長生和秀敏氏の口から、広島大学では学部の壁をすべて取り払って学部教育では教養教育を行い専門教育は大学院で行うという案に、ある全学的な会議のメンバー全員が賛成しているという発言が聞かれた。国立大学の中での置かれた立場などの違いもあってか、信大

ではこの趨勢に対する反応に温度差があることは否めない。しかし、理系ならいざしらず文系の大学院修士を社会が未ださほど必要としていないといった問題はあるが、この趨勢は止めることはできないだろう。英米文学教育に関しても、学部は基礎的専門教育、高度な専門教育は大学院で、という趨勢は否定しがたい、いや、もう実際にそうになっていると言えるだろう。

II マルチメディア時代の英米文学研究／教育

さて、次はマルチメディアの英米文学研究／教育への活用についてである。機材別そして用途別について書こう。まず、ビデオ、LD、DVDといった機材について。

[ビデオ、LD、DVD]

ビデオに関しては、書くまでもないかもしれない。映画ソフトはもちろん活用しているし、ここ数年のうちにNHKで放映された「映像の世紀」「市民の20世紀」「アメリカ黄金の50年代」「知への旅 グレート・ブックス」シリーズなどは大変貴重な映像満載で教育に大いに活用している。このNHKのシリーズは、いくら資金を費やしても購入すべきと言えるほど英米文学教育にとって貴重なものである。また、一般的な普及はいまいちだが、映像・音声・文字を伝える機材としてのLDとDVDの進歩は著しく、大いに教育に活用できる。たとえば、ランダム・アクセスや正確な二点間リピートは、外国語や映画研究などの教育に有効である。また、字幕に関しては、ソフトにもよるが無字幕、英語、日本語の三種類程度は標準的である。これらの機能の教育への応用可能性は説明する必要はないだろう。

次に、マルチメディアの中心的な機材であるコンピュータについて書こう。まず、コンピュータを用いた文献探索法から。

[コンピュータ]

◇文献探索

文献と言えば、従来は、図書館でカードを引いたり、本の巻末に付いていたりする参考文献一覧表で探したりするのが一般的であった。しかし、今は、もちろんインターネットのホームページ上で検索ができる。既刊の和洋書に関してたとえば私が最も頻繁に利用しているのは、学術情報センター (<http://webcat.nacsis.ac.jp/>)、次に、信大図書館をはじめとする国の内外の各図書館である。和書新刊本に関しては、図書流通センター (<http://www.trc.co.jp/index.asp>) と、少し新刊情報が遅いが日本書籍出版協会の「本をさがす」 (<http://www.books.or.jp/>)、さらには有名書店や生協のホームページもある。既刊洋書に関しては、米国議会図書館 (<http://lcweb.loc.gov/homepage/lchp.html>) やブリティッシュ・ライブラリー (<http://www.bl.uk/>)。新刊洋書に関しては、アメリカ系はAmazon (<http://www.amazon.com/>) や Spree (<http://www.spree.com/>) や Books com (<http://www.books.com/scripts/default.exe>) イギリス系はInternet Bookshop (<http://www.bookshop.co.uk/hme/hmepage.asp>)などをよく利用している。最近では、過当競争気味で、Amazonと熾烈な競争を繰り広げるBarnes & Noble (<http://www.barnesandnoble.com/>) や Kingbooks (<http://www.kingbooks.com/>)、さらには、欧米25店以上のオンライン書店を自動検索して価格の安い順に並べてくれるAcse (<http://www.acses.com/>) というサービスまである。洋書古書も、たとえば、Biblifind (<http://208.144.214.69/cgi-bin/texis.exe/>)

search.vor)などは、全世界的なネットワークで本を探してくれるので、まず見つからない本はないと言っていいくらいである。要するに、以前は大変手間がかかった文献探索・入手が大いに迅速化・簡便化され、手に入らない文献が無くなったと言ってもいいであろう。ネットによる文献探索・入手は、とりわけ従来はそれが困難であった外国研究 (foreign studies) 系の分野の研究者にとっては今や絶対欠かすことのできないメディアとなった。少し遅れているという感じがした信大の図書館もここ1, 2年の整備はめざましく、インターネット上での図書購入・文献複写・現物貸借申込システムは便利この上ない。私が1989年に修士論文をコンピュータを用いて書いて直ぐに就職した当時、まさかこのような時代がやってこようとは殆どの人は予想だにしていなかった。一ドル360円時代、洋行もままならない時代を知る研究者にとっては、まさに夢が実現したと言っても大袈裟ではなからう。

以上は本の形態のテキスト (文字テキスト) であるが、次は電子テキストである。

◇電子テキスト

CD-ROMの形態で売られているものには、(まだまだ価格の張るものもあるが) 20世紀のはじめくらいまでの著名作家の多くのテキストが既に発売されている。また、インターネット上で手に入るテキストも膨大である。しかし、私が専門とする20世紀のアメリカ文学のテキストは、著作権の関係のためか手に入るものは少ない。しかし、自分で電子テキストを作ることも手軽にできる。本をスキャナで読み取り文字認識ソフトに認識させて文字情報に変換するだけである。ただし、本1ページを読み取るのに1分くらいはかかるので本一冊を読み取るのはかなり時間がかかるし、そのうえ正しく認識する率も100%ではないという短所もある。だが、いずれこの短所も解決されるだろう。いずれにせよ、これらの電子テキストは容易に自分のテキストに取り入れることもできるので、論文の中での引用を間違えることもなくなるし、また、検索も容易で、ある言葉がテキストでどのように使用されているかを調べることもできる、など様々な利用法が可能であろう。

◇情報入手

テキスト以外の情報入手ならびに情報交換に役立つコンピュータのソフト (機能) は、電子メールである。ある有名作家メーリング・リストに入れば、その作家に関する様々な情報が随時入ってくる。また、研究者個人同士の情報交換、学生の指導、学生のレポート提出なども電子メールで行うのがごく普通になってきている。また、ここ数年のインターネット上のホームページから得られる情報の充実ぶりには目を見張るものがある。英語英米文学関係の英語論文 (そして日本語論文) の標準的書式である *MLA Handbook for Writers of Research Papers* が第4版 (1995年) からインターネット上で得た情報の引証法を追加し、実際にそういった情報の引証が増えている。英米文学に関して言えば、英米文学一般に関するものから個々の作家に至るまで様々なホームページ (たとえば、シェイクスピアのホームページ [<http://www.shakespeare.com/>]) がインターネット上で公開されている。もちろん、これらのホームページは検索エンジンで検索すればいくつもヒットする。

◇論文・レポート作成法

次は論文作成法である。英文であれ和文であれ、ワープロを用いずに論文・レポートを書くことは今やまずない。ただ、日本人にとって和文はともかく (日本語を軽視しているわけではない。ちなみに、私が学んだ大学では、外国文学・語学ならびに外国語系の学問を勉強

する学生には「国語」が必修であった。)、英文で書くことは大変難しい。かなり英語力のあ
る人(たとえば TOEFL600点以上、すなわち大学で英語を教えられるくらいの英語力があ
る人)の書いた英文も実際はまだまだだというのが真実であろう。たとえば、日本語検定1
級(英語で言えば英検1級、TOEFL570点くらいであろうか)程度の力を持つ外国人が書
いた日本語を見れば、かなり英語ができる日本人の英語もきっとこんなもんだと分かる
と思う。朱を入れるだけでは、日本語らしい日本語にはなかなかならない。書き直さない
と無理である。日本人なら、日本語に関しては、日本語だとかこういう表現はしないとか、この
語とこの語は決して結びつかないとか分かるが、英語に関してそのような感覚を身に付ける
ことは殆ど不可能だと言っている。特に、哲学、思想、社会理論などの分野と同じく、英米
文学の論文を書くことはかなり難しいというのが私の率直な印象である。私自身も何年前
に20世紀のアメリカの小説に関して英語で書いた論文をアメリカのジャーナルに送って掲載
されたことがあるが、英語らしい英語かどうかまったく自信がないし、日本語で書いたとき
と比べると大いに単純化ならびに図式化して書いた。はたして正しく理解されたのだろうか。
もちろん(電子メールなどで)下手な英語で発信してはいけないと言っているのではないが、
英語を書くことは相当難しい。以上が、英語を書くことに関する私の率直な印象である。

さて、この英語論文作成にもコンピュータはかなり威力を発揮する。今やほとんどのワー
プロ・ソフトについているスペルチェック機能によって英語の論文にミススペルは無くなっ
たし、なかには文法チェックをしてくれるものもある。それどころか、まだまだ精度は決して
高いとは言えないかもしれないが日英(英日)翻訳ソフトも多数出ている。たとえば、こ
の段落の最初の文をあるソフトで英訳させると、こうなる。さて、この英語論文作成にもコ
ンピュータはかなり威力を発揮する。=By the way, a computer shows power in this
English thesis making also pretty. 単文ということもあるが、まあまあである。また、引用
も上記した電子テキストからコピー・アンド・ペーストすれば間違えることはない。さらに
は、電子辞書も大いに役立つ。OED など数十巻におよぶ大部の事典はもちろん、英作文に
ついて言えば、電子英和辞典(たとえば、CD-ROM『ランダムハウス英語辞典』)を和英辞
典として使うといった検索なども可能である。私自身の経験を少し述べれば、1997年に卒論
を1999年に修論をとともに英語で書いた(卒論は日本語でも書くことも可但实际上に日本語で書
く学生が殆どであったが、指導教授がアメリカ人だったので英語で書いた)。修論は、卒論
と同じように英語で書いたが、英語を酷評された。後から考えると、卒論の先生は通じれば
いいという基準で、そして、修論の先生は英語らしい英語にちゃんと直すという基準で、チ
ェックをしたのである。どちらの論文も、とても朱を入れるくらいでは直せない英語だった
ことは想像に難くない。しかし、前述したように、両方の論文とも大学のコンピュータ室に
こもって当時まだ珍しかったスペルチェック機能が(そして日欧混合文機能も)ついた
Twinstar というソフトを用いて書いたもので、内容はともかく「スペルミスがまったくない
じゃないか」と驚かれた(ちなみに私は正直なので事情を説明した)。ただし、当時のコン
ピュータ(NEC9801M2)の操作はすごく難しく大変だったことを覚えている。いずれに
せよ、よほど英語が達者なものがあらゆる参考図書や機材を使って英語を書いてもなかなか
ネイティブの知識人のような英語は書けないという事実は否定しがたい。だが、マルチメ
ディアの有効性も否定しがたい。(マルチメディアを活用した英文作成に関しては、平成10・

11年度の教育システム研究開発センターのプロジェクトでも取り上げる予定である。)

さて、以上、マルチメディアの英米文学研究への応用の現状について書いた。まだまだ書くことはいくらでもあるが、英米文学研究におけるマルチメディアの有効性に関して十分に分かっていただけたと思う。次は、マルチメディアを用いた研究をどう学生に教育するかについて私の実践を通して書こう。

理想を言えば、教養教育で全員がコンピュータ・リテラシーを身に付けるのが望ましい。しかし、眞野論文にあるように、信大の情報教育は、お世辞にも進んでいるとは言えない。教育どころか、まずインフラが整備されていない。私が一昨年の9月1日に広島大学総合科学部から転任してきて驚いたのは、その点である。統合移転が完了して設備がすべて更新された大学と比較するのは酷だが、広島大学には少なくとも各学部（さらには学科、専攻など）に学生が自由に使える端末室（たとえば総合科学部には20台設置の一室）があり、全学共同利用施設の情報処理センターの他に、教養教育のほとんどを担当する総合科学部に隣接する西図書館にも数十台配備の端末室があった。さらに、LL教室は、コンピュータ支援外国語教育（CALL=Computer Assisted Language Learning）が行えるコンピュータ端末付き2室を含めて合計5室あった。また、教官のコンピュータ利用もかなり強制的で、平成9年4月の段階で総合科学部では会議通知はすべて電子メールで行われていた。私が信大人文科学部に赴任してすぐに思ったことは、学生用の端末を何とかして設置したいということであった。幸い私の前任者が残してくれたMac一台にWindows一台を何とか買い足して、平成10年度からマルチメディアを用いた英米文学教育を始めることができるようになった。しかし、コンピュータは21世紀の読み書き算盤とか盛んに言われているものの、学生のコンピュータ・リテラシーは、皆無に近かった。平成10年度人文科学部英米文学分野進級生（二年次生）12名のうち、一年次に情報教育を受けたものは僅か2名であった。しかも、そのうちの1名はとてもしリテラシーがあるとは言えなかった。結局、上述したようなマルチメディアを用いた英米文学研究が実践できる程度のコンピュータ・リテラシーを持つものは12名中僅か2名で、ともに家庭でリテラシーを身に付けていた。12名中残り10名はイリテレットであった。前述した眞野論文にあるように信大の共通教育の情報教育が十分に整備されていると言えない状況下では、専門教育で補うしかない。私はコンピュータに関しては素人であるが、英米文学に関するカルチュラル・リテラシーと同様で、英米文学に関するコンピュータ・リテラシーなら何とかあった。具体的にまず行ったのは、タッチタイピングを習得させることであった。ここから始めなければならないというのが実情である。もちろん、タイピングの習得に良いソフトが出ているので、十数時間もあればタッチ・タイピングが身に付く。この基礎の上に、電子メールとインターネット、そしてワープロソフト、さらにはスキャナーの使用法を教授すれば、英米文学研究に必要なコンピュータ・リテラシーに関してはほぼ十分であろう。ほぼ半期一コマ分に当たる位の指導であったが、すべて授業外で行った。この内容を正規の授業を開設して行うことも検討中である。だが、この英米文学研究に必要なコンピュータ・リテラシーを授業外で習得させた上で、その英米文学研究への応用に関しては前述した「英米文学概論」で教えることに今のところしている。中等教育（中高）において情報科目を受講した学生が大学に入学するようになるまでは、あるいは、信大の共通教育の情報教育が充実するまでは、このような状況が続くようである。

ま と め

さて、以上、大学改革ならびに学生の教養的リテラシーの変化による英米文学研究／教育の変容、そして、マルチメディア利用による英米文学の研究／教育の変容について述べた。この変容の著しさは理解していただけたと思う。英米文学という専門分野プロパーのリテラシーに関しては、特に批評理論のような領域では変化が目まぐるしい。マルチメディアに関しては、それ以上に変化が目まぐるしく、前述したように10年前にはまったく予想できなかった事態が起きている。論文作成法ひとつとっても、1981年に刊行された『英文科学生必携ハンドブック』の卒論・レポート作成に関する記述からは隔世の感があるし、1995年に書かれた『卒論を書こう』からも大変化がある。もちろんマルチメディアを用いても情報の取捨選択と処理があくまで必要だという問題はあるし、高度情報化社会にも暗部がないとは言えない（たとえば、西垣論文を参照のこと）。だが、これだけ重宝なものを利用せずにはられない、というのが現状である。

今までは、このような変容に対して大学教員は個人個人で対応するというのが主であった。しかし、今後よりいっそう目覚ましい変化があるかもしれないということを想定すると、そのような対応ではいろいろと不都合が生じるのではないかと思う。コンピュータにしても、それほど難しくなくなったとはいえ、「まだまだそれほど万人にとって使いやすくわかりやくいようにはなっていない」（佐伯・西垣・三宅 293）というのも事実である。英米文学以外の学問分野についても言えることだが、FD体制の整備が急務だろう。いやそんな大袈裟なものでないにしても、大学の講習会・勉強会が必要であると思う。それどころか、前述したように、信大では情報関係のインフラの整備が急務である。ただ、このインフラの整備の資金のめどは何かつかうかもしれないが、情報教育を担当する人員が純増になるとは思えない。私が共通教育で担当する外国語教育と同じで、情報教育もあれやこれや勝手な口出しをするものの協力はしないという人が多いだろうと予測できる。前述したように各専門分野の専門教育で情報教育を行ったり、共通教育の情報教育に協力できる教官を学内で集めて体制を整えるなどの対策を立てる必要があるだろう。

以上、20世紀末に日本の高等教育が直面したカルチュラル・リテラシーとコンピュータ・リテラシーという二つのリテラシー問題と英米文学研究／教育との関わりを論じた。この二つは乗り切ることができると私は高をくくっている。しかし、前述したように、英米文学（そして英語学）という学問分野あるいは英文科という教育体制には、もっと大きな問題がある。それは、日本社会における英学（特に英文科あるいは英語英米文学）の役割の変貌といった問題である。おそらく日本の国公立大学ならびに大学院で学生数が最も多い学問分野は、英語英米文学であろう。しかし、昔も今も、学生は、英語学・英米文学を勉強したいというよりは、英語の実用的な力をつけたいとかいった実践的な目的を持つものが多い。その実態に合わせるかのように、文学部ではなく、より実践的な外国語学部英語学科（ちなみに、外国語学部は英語で Faculty of Foreign Studies であり Foreign Languages ではない。実際に文学・文化・言語学ばかりでなく経済とか法律とか国際関係論などのカリキュラムも充実していることが多く、就職も文学部に比べて圧倒的に良い。）とかいった学部・学科が昭和40年代ころから続々と新設されるようになった（ここ十年間でさらに国際言語文化とか

いった学部学科が加わった)。もはや、英語英米文学という非実学的な学問分野をおいていいのは(そんなことを教えていても社会に役立てるのは)、日本の国公立大学の英文科トップ30だけで、他は(たとえば外国語学部英語科とか、英米研究学科とかいった)もっと実学的な学科に変えてしまえ、という議論もあり、私もそれにある程度までは賛成である。他の外国文学・語学系の学問分野についても言えることかもしれないが、外国文明輸入促進業という英文科(英語英米文学という学問分野)の役割あるいは機能は終わったかなというのが偽らざる実感である。いずれにせよ、他の学問分野以上に英語英米文学という学問分野が深刻な危機にさらされていることは否定できない。この問題は、別稿に譲ろう。

引用文献

- 有馬哲夫「サイバースペースのシェイクスピア—デジタル化されるシェイクスピア」、『英語青年』1997年1月号：42-44。
- 石木利明「英米文学研究のためのインターネット」、『英語青年』1997年1月号：45-50。
- 梶田毅一「青年期の生き方について」、『学生相談研究』Vol.18 No.2 (1998年9月)：85-106。
- 研究社出版編集部編『英文科学生必携ハンドブック』、研究社、1981年。
- 信州大学共通教育課程委員会平成10年度以降のカリキュラム具体化ワーキング・グループ「平成10年度以降のカリキュラム具体化ワーキング・グループ最終報告書」1998年1月。
- 大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について(答申)—競争的環境の中で個性が輝く—」、1998年10月26日。
- 高柳俊一『英文学入門』、大修館書店、1982年。
- 榎木伸明『卒論を書こう — テーマ探しからスタイルまで』三修社、1995年。
- 加藤行夫・境野直樹「インターネットと文学研究」、『英語青年』1995年6月号：9-11。
- 佐伯胖・三宅なほみ・西垣通「コンピュータ・リテラシーの教育」、『情報とメディア』岩波講座 現代の教育8 (岩波書店、1998年) 所収。
- 清水明「マルチメディアと高等教育」、『教育システム研究開発センター紀要』第3号(1997年10月)：71-73。
- 全国国立大学教養教育実施組織代表者会議1998「新しい教養教育への展望 — われわれはこう考える」。
- 長尾輝彦・小沢博・森田孟・富士川義之・土岐恒二・喜志哲雄・植木研介ほか「特集 これからの大学英文科」、『英語青年』1996年9月号：6-15。
- 西垣通「高度情報化による社会の変容 — 知識と知恵」、『情報とメディア』岩波講座 現代の教育8 (岩波書店、1998年) 所収。
- 眞野悳一「信州大学における共通教育としての情報教育」、『教育システム研究開発センター紀要』第3号(1997年10月)：53-58。
- Bloom, Alan. *The Closing of the American Mind*. 1987. London: Penguin Books, 1988. ブルーム『アメリカン・マインドの終焉』菅野盾樹訳、みすず書房、1988年。
- George P. Landow/有馬哲夫 “Hypertext, Literature, and Education: An Interview with George P. Landow”. 『英語青年』1998年5月号：70-75。
- Hirsch, E.D. *Cultural Literacy*. Boston: Houghton Mifflin, 1987. ハーシュ『教養が、国をつくる。—アメリカ建て直し教育論』中村保男訳、TBSブリタニカ、1989年。

- , Joseph F. Kett, and James Trefil. *The Dictionary of Cultural Literacy*. 1987. 2nd ed. Boston: Houghton Mifflin, 1993. 『アメリカ教養辞典』中村保男・川成洋監訳, 丸善, 1997年。
- Rivkin, Julie, and Michael Ryan, eds. *Literary Theory: An Anthology*. Malden, Mass. and Oxford: Blackwell, 1998.
- ランドウ 『ハイパーテキスト—活字とコンピュータが³出会うとき』若島正・板倉徹一郎・河田学訳, ジャストシステム, 1996年。